

大谷 いづみ教授 略歴と業績

I. 略 歴

1959年7月	愛知県に生まれる
1983年3月	上智大学文学部ドイツ文学科を経て同文学部哲学科卒業
1983年4月～1993年3月	東京都立昭和高等学校教諭「倫理」
1993年4月～2000年3月	東京都立国分寺高等学校教諭「倫理」
2000年4月～2002年3月	上越教育大学大学院学校教育研究科修士課程社会系コース (東京都より派遣)
2002年4月～2004年3月	東京学芸大学教育学部附属高等学校大泉校舎文部科学教官「公民」
2003年4月～2006年3月	立命館大学大学院先端総合学術研究科一貫制博士課程
2004年4月～2008年3月	千葉科学大学薬学部・危機管理学部非常勤講師「生命倫理学」
2004年5月～2007年3月	文部科学省初等中等教育局兼任教科調査官 高校「倫理」
2007年4月～2025年3月	立命館大学産業社会学部教授
2016年1月～2016年9月	マンチェスター大学 SALC 客員研究員 (在外研究)
2025年3月	立命館大学定年退職
2025年4月	立命館大学衣笠総合研究機構特別招聘研究教授・名誉教授

(主な学内役職歴)

2007年4月～	生存学研究センター / 研究所 運営委員
2007年4月～2014年3月	人間科学研究所運営委員
2010年4月～2014年3月	人を対象とする研究倫理審査委員会審査委員
2019年4月～2023年3月	生存学研究所副所長
2023年4月～2025年3月	生存学研究所所長
2025年4月～	生存学研究所副所長

II. 専門分野

専門分野 生命倫理学・生命倫理教育

担当科目 道德教育論, いのちの教育, 生命倫理学, 生命科学与倫理, 教育臨床研究, 現代社会特殊研究
学 位 博士 (学術), (立命館大学大学院先端総合学術研究科, 2006年3月)

研究課題 安楽死・尊厳死論史, 生命倫理学・死生学の日本導入史, 生・老・病・死の言説構造の解析と
組み替え, メディアに描かれる生・老・病・死, アクセシビリティと生・老・病・死, ジェン
ダーと生命倫理

所属学会 日本生命倫理学会, 日本医学哲学・倫理学会, 日本倫理学会, 日本保健医療社会学会, 障害学

会，日本社会学会，日本社会科教育学会，日本公民教育学会，全国社会科教育学会等

Ⅲ. 主な研究業績

著 書

1. (分担執筆)「現代科学技術の発達と生命倫理」東京都高等学校倫理・現代社会研究会編『公民科「倫理」の指導内容の展開——「人間としての在り方生き方」についての自覚を深めさせる「倫理」』清水書院，1992年4月，180-183頁。
2. (分担執筆)「キリスト教の人間観(2) 愛——アンデス航空機事故にアガペーを見る」「人生における宗教の意義——『ひかりごけ』にみる人間の有限性」東京都高等学校倫理・社会研究会編『公民科「倫理」「現代社会」教材化の研究』東京書籍，1994年4月，88-90頁，109-110頁。
3. (企画・編集・分担執筆)東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会編著『キミの悩みに乾杯！——教師の描いた素顔の高校生』毎日新聞社，1999年2月。
4. (企画・編集・分担執筆)生命倫理教育研究協議会編著『テーマ30 生命倫理』教育出版，1999年2月。
5. (分担執筆)「情報と偏見—— AIDS 表現をめぐる」，尾田幸雄監修，岩佐信道・西野真由美編著『「心の教育」実践体系10 国際化・情報化社会における心の教育』日本図書センター，1999年9月，148-164頁。
6. (企画・編集・分担執筆)「「生命の教育」と子どもの現在——生命・身体をめぐる」，「家族って何だ？——代理出産」「選ばれる生命・選ばれない生命」「優生学の名の下に——アメリカとドイツの優生学」「ダイエット／摂食障害」「カルトとマインド・コントロール」「あとがきにかえて」，「学校における生命倫理教育ネットワーク」編著・ダリル＝メイサー監修『生命の教育』清水書院，2000年8月，25-32, 78-81, 82-85, 86-89, 130-133, 138-141, 286-287頁。
7. (分担執筆)「生命」全国公民科・社会科教育研究会編『高等学校公民科 指導と評価——課題追求学習をどう展開・評価するか』清水書院，2003年8月，64-69頁。
8. (分担執筆)「初等学校における「いのちの教育」」「中等学校におけるバイオエシックス教育」「将来の市民のためのバイオエシックス教育」木村利人編集主幹『バイオエシックスハンドブック——生命倫理を超えて』法研，2003年12月，398-404頁。
9. (分担執筆)「現代の倫理的課題に関する学習」日本公民教育学会編『テキストブック 中学校・高等学校公民教育』第一学習社，2004年3月，119-122頁。
10. (分担執筆)「「生と死の教育」のポリティクス——グローバリゼーション・ポストコロニアル・ジェンダー」二谷貞夫編『21世紀の歴史認識と国際理解——韓国・中国・日本からの提言』明石書店，2004年8月，261-269頁。
11. (分担執筆)「「いのちの教育」に隠されてしまうこと——「尊厳死」言説をめぐる」松原洋子・小泉義之編『生命の臨界——争点としての生命』人文書院，2005年2月，91-127頁（初出は『現代思想』第31巻第13号，2003年11月，180-197頁）。
12. (分担執筆)「「問い」を育む——「生と死」の授業から（聞き手 松原洋子・小泉義之）」松原洋子・小泉義之編『生命の臨界——争点としての生命』人文書院，2005年2月，128-155頁。
13. (分担執筆)「生と死の語り方——「生と死の教育」を組み替えるために」川本隆史編『ケアの社会倫

- 理学——医療・看護・介護・教育をつなぐ』有斐閣, 2005年8月, 333-361頁。
14. (分担執筆)「生きる権利・死ぬ権利——だけでなく」上野千鶴子・大熊由紀子・大沢真理・神野直彦・副田義也編『ケアという思想』(ケア その思想と実践 1) 岩波書店, 2008年4月, 195-210頁。
 15. (分担執筆)「生権力と死をめぐる言説」島蘭進・竹内整一編『死生学とは何か』(死生学1), 東京大学出版会, 2008年5月, 53-73頁。
 16. (分担執筆)「倫理」東京学芸大学社会科教育学研究室編『中高社会科へのアプローチ——社会科教師の専門性育成』2008年6月, 167-173頁。
 17. (共著・座談会)「生存の臨界・Ⅰ」「生存の臨界・Ⅱ」「生存の臨界・Ⅲ」立命館大学生存学研究センター編『生存学 vol.1』, 2009年2月, 6-22, 112-130, 236-264頁。
 18. (分担執筆)「死の教育」「尊厳死」望月昭・中村正・サトウタツヤ編著『「対人援助学」キーワード集』, 晃洋書房, 2009年4月, 95-96, 139-140頁。
 19. (分担執筆)「「先哲の基本的な考え方」の学習」「科学技術と倫理」の学習」公民教育学会編『公民教育事典』第一学習社, 2009年6月, 122-123, 136-137頁。
 20. (分担執筆)「「尊厳死」思想の淵源——J・フレッチャーの anti-dysthanasia 概念とバイオエシックスの交錯」小松美彦・香川知晶編著『メタバイオエシックスの構築へ——生命倫理を問いなおす』, NTT 出版, 2010年3月, 207-233頁。
 21. (분담 집필) 오타니 이즈미, 정효운 역「실익은 권력과 죽음을 둘러싼 담론」, 시마조노 스스무・다케우치 세이치 편『사생학이란 무엇인가』도서출판 한울, 2010.4, 77-100 (ジョン・ヒョウン訳による韓国語版, 原著は(分担執筆)「生権力と死をめぐる言説」, 島蘭進・竹内整一編『死生学とは何か』(死生学1), 東京大学出版会, 2008年5月, 53-73頁)。
 22. (分担執筆)「倫理」東京学芸大学社会科教育学研究室編『改訂新版中高社会科へのアプローチ——社会科教師の専門性育成』2010年7月, 173-179頁。
 23. (共編著・分担執筆)「「自分らしく、人間らしく」死にたい?——安楽死・尊厳死」「あとがき」玉井真理子・大谷いづみ編『はじめて出会う生命倫理』有斐閣, 2011年3月, 187-208, 313-315頁。
 24. (分担執筆)「尊厳死」高橋恵子・湯川良三・安藤寿康・秋山弘子編『発達科学入門 [3] 青年期～後期高齢期』東京大学出版会, 2012年4月, 280-281頁。
 25. (分担執筆)「生命倫理・環境倫理」日本社会科教育学会編『新版 社会科教育事典』ぎょうせい, 2012年6月, 216-217頁。
 26. (分担執筆)「患者および一般市民のための生命倫理教育——パッケージ化された「生と死の物語」の構造を読み解く」伴信太郎・藤野昭宏責任編集『医療倫理教育』(シリーズ生命倫理学19) 丸善, 2012年7月, 108-128頁。
 27. (分担執筆)「安楽死と尊厳死」伏木信次・樫則章・霜田求編『生命倫理と医療倫理改訂3版』金芳堂, 2014年3月, 108-115頁。
 28. (分担執筆)「安楽死・尊厳死——少子高齢社会における「死に方／死なせ方」の政治学」日本老年行動科学会監修・大川一郎編集代表『高齢者のこころとからだ事典』中央法規, 2014年9月, 542-543頁。
 29. (分担執筆)「人間の尊厳と死——「死の尊厳」の語られ方を読み解く」柏木恵子・高橋恵子編『人口の心理学へ——少子高齢社会の命と心』ちとせプレス, 2016年7月, 183-197, 266頁。

30. (分担執筆)「安楽死と尊厳死」伏木信次・榎則章・霜田求編『生命倫理と医療倫理 第4版』金芳堂, 2020年3月, 144-153頁。
31. (共著・分担執筆)「＜問＞の生を聴く／＜問＞の生を語る」「ディスカッション」安藤泰至・島菌進編著『見捨てられる＜いのち＞を考える——京都 ALS 嘱託殺人と人工呼吸器トリアージから』晶文社, 2021年10月, 106-137, 154-162頁。
32. (単著・解説)「解説 それぞれの「良い死／唯の生」」立岩真也『良い死／唯の生』筑摩書房, 2022年12月, 571-581頁。

翻 訳

1. (単独訳)Leder, D., 2003, "Bioethics Education III. Secondary and Postsecondary Education," Stephen G. Post ed., 2003, *Encyclopedia of Bioethics 3rd edition*, Macmillan Reference, 303-305, USA (= 大谷いづみ訳, 「生命倫理教育 III. 中等教育およびそれ以後の教育」生命倫理百科事典翻訳刊行委員会編・日本生命倫理学会編集協力『生命倫理百科事典』丸善, 2007年1月, 1939-1941頁)。
2. (単独訳)Purtilo, R.B., 2003, "Bioethics Education IV. Other Health Professions," Stephen G. Post ed., 2003, *Encyclopedia of Bioethics 3rd edition*, Macmillan Reference, 205-207, USA (大谷いづみ訳, 「生命倫理教育 IV. 他の保健医療専門職」生命倫理百科事典翻訳刊行委員会編・日本生命倫理学会編集協力『生命倫理百科事典』丸善, 2007年1月, 1941-1943頁)。

論 文

1. (単著)「生命倫理とアイデンティティの発見①～⑥」『月刊ホームルーム』第15巻4-9号, 1990年4-9月。
2. (単著)「生命倫理への招待」『都倫研紀要』第29集, 1991年3月, 50-54頁。
3. (単著)「「答えのない問い」の答えをいかにして評価するか——生命倫理を軸としたテーマ学習と評価法」『全倫研紀要』第28号, 1992年3月, 69-78頁。
4. (単著)「公民科「倫理」において生命倫理教育の可能性を探る」『社全教紀要』, 1995年3月, 1-15頁。
5. (単著)「情報・偏見・アイデンティティ (1) —— AIDS 表現をめぐる」『都倫研紀要』第34集, 1996年3月, 73-82頁。
6. (単著)「情報・偏見・アイデンティティ (2) —— 情報と主体性」『都倫研紀要』第35集, 1997年3月, 83-92頁。
7. (単著)“Bioethics Education in a High School Ethics Class,” *Eubios Journal of Asian and International Bioethics*, Eubios Institute, Vol.9 (3), 1997.5, 78-79.
8. (単著)「高等学校倫理教育としての生命倫理教育」『国際 BIOETHICS NETWORK』(早稲田大学人間総合研究センター) vol.29, 1999年9月, 4-8頁。
9. (単著)“How to Teach About AIDS in High School Ethics Class: To Think How Society Should be and How Human Beings Should Live,” *Eubios Journal of Asian and International Bioethics*, Eubios Ethics Institute, Vol.10 (1), 2000.1, 13-15.
10. (単著)「高等学校公民科『倫理』における AIDS 教育——人間の生き方と社会の在り方を考えるために」『全倫研紀要』第36集, 2000年3月, 49-58頁。

11. (単著)「生命倫理を核とした公民科『倫理』の展開」メイサー＝ダリル編『日本における高校での生命倫理教育』ユウバイオス倫理研究会, 2000年3月, 16-25頁。
12. (単著)「新学習指導要領で「倫理」は生き延びることができるのか?」公民教育研究室・教科教育開発研究室『高等学校公民科の授業の改善に関する研究』国立教育研究所, 2000年3月, 24-25頁。
13. (単著)「実効ある「宗教」学習に取り組むために——若者, カルト, 自分探し」公民教育研究室・教科教育開発研究室『高等学校公民科の授業の改善に関する研究』国立教育研究所, 2000年3月, 66-70頁。
14. (単著)「「人権」学習を改善するための倫理的視点——人権を脅かす深層心理にせまる」公民教育研究室・教科教育開発研究室『高等学校公民科の授業の改善に関する研究』国立教育研究所, 2000年3月, 82-86頁。
15. (共著・座談会)大谷いづみ・アルフォンス＝デーケン・近藤卓ほか「座談会 生と死から学ぶいのちの教育」鈴木康明編集『現代のエスプリ No.394 生と死から学ぶいのちの教育』2000年5月, 5-38頁。
16. (単著)「「倫理」はいかにして生き延びることができるのか?——「倫理教育」の再生のために」『全倫研紀要』第37集, 2001年3月, 54-61頁。
17. (単著)「生命倫理教育の<学力>とは何か——市場原理と優生学の観点から」『都倫研紀要』第39号, 2001年3月, 72-78頁。
18. (単著)「思春期に寄りそう」(特集=十代の性)『福音と世界』第56巻11号, 2001年11月, 42-50頁。
19. (共著)「われわれに死ぬ義務はあるか——ジョン・ハードウィッグの所論を手がかりとして」『上越教育大学研究紀要』21 (1), 2001年10月, 283-299頁。
20. (単著)「生と死の語り方——「わたしたち」の物語を紡ぐ」(上越教育大学修士論文, 2022年1月)。
21. (単著)「「安楽死・尊厳死」論の現在」『都倫研紀要』第40号, 2002年3月, 72-80頁。
22. (単著)「高等学校公民科「倫理」におけるカルト対策授業の試み——「自分探し」に着目して」『社会科教育研究』87号, 2002年3月, 64-74頁。
23. (単著)「アメリカ合衆国における「安楽死・尊厳死」の現在と「死を学ぶ教育」の課題」『公民教育研究』vol.10, 2002年3月1-17頁。
24. (単著)「アメリカにおける「死の要請」の推移:「尊厳死」の登場——生命倫理教育/デス＝エデュケーションのための研究ノート」『都倫研紀要』第41号, 2003年3月, 90-102頁。
25. (単著)「アメリカにおける「死の要請」の推移:「安楽死」から「合理的自殺」へ——生命倫理教育/デス＝エデュケーションのための研究ノート」『東京学芸大学附属学校 研究紀要』第30集, 2003年6月, 137-147頁。
26. (単著)「「いのちの教育」に隠されてしまうこと——「尊厳死」言説をめぐる」(特集=争点としての生命)『現代思想』第31巻第13号, 2003年11月, 180-197頁。
27. (単著)「「生と死の自己決定」を教える?」(研究手帖)『現代思想』第31巻第15号, 2003年12月, 206頁。
28. (単著)「「尊厳死」言説の誕生——1960年代以降のマスコミ報道を中心に」立命館大学大学院先端総合学術研究科博士予備論文, 2004年1月。
29. (単著)「生殖技術をどのように教えるか——ジェンダーの視点による高校生命倫理教育の試み」

- 『F-GENS ジャーナル Frontiers of Gender Studies』 vol.1, 2004年3月, 219-220頁。
30. (単著)「学校教育における「いのちの教育」の現状とその課題」『曹洞宗埼玉県第一宗務所教化研究会創立十周年記念講演録』, 2004年3月, 270-285頁。
 31. (単著)「生と死の教育」(特集=教育の危機)『現代思想』第32巻第4号, 2004年4月1日, 142-157頁。
 32. (単著)「生命「倫理」教育と／の公共性」『社会科教育研究』No.92, 2004年9月, 67-78頁。
 33. (単著)“Teaching About Reproductive Technology in High School Ethics Class,” Proceedings of Workshop for Junior Scholars, January 6-8 2004, Rethinking Science and Medicine from the Perspective of Gender in the Post-Human Genome Project Era (OCHANOMIZU UNIVERSITY, The 21st Century COE Program, Frontiers of Gender Studies), *F-GENS Publication Series 2*, 2004, 10, 34-45.
 34. (単著)「「尊厳死」言説の誕生」(特集=生存の争い)『現代思想』第32巻第14号, 2004年11月, 142-152頁。
 35. (単著)「太田典礼小論——安楽死思想の彼岸と此岸」『死生学研究』2005年春号, 2005年3月, 99-121, 285頁。
 36. (単著)「「生と死の教育」のポリティクス——「生と死の語り方」を再考する」(東京大学21世紀COE「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」シンポジウム「死生観とケアの現場」第一部(「死生のケア・教育・文化の課題」報告)『死生学研究』2005年春号, 2005年3月, 199-206頁。
 37. (共著)「討議記録」「総合討議」(東京大学21世紀COE「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」シンポジウム「死生観とケアの現場」第一部(「死生のケア・教育・文化の課題」報告)『死生学研究』2005年春号, 2005年3月, 207-219, 255-274頁。
 38. (単著)「「市民的自由」としての死の選択——松田道雄の「死の自己決定」論」『思想』981号[2006年1月], 2005年12月, 101-118頁。
 39. (単著)「「尊厳死」言説の誕生」立命館大学大学院先端総合学術研究科博士学位請求論文, 2006年3月。
 40. (単著)「「生と死の教育」のゆくえ」『人権教育研究』第6集, 2006年8月, 4-7頁。
 41. (単著)「安楽な死、尊厳ある死——の遙か手前で」(特集=医療崩壊——生命をめぐるエコノミー)『現代思想』第36巻第2号, 2008年2月, 174-183頁。
 42. (単著)「「安楽な死・尊厳ある死」の位置取りをめぐる」(特集=がんの緩和医療)『Pharma Medical』26巻7号, 2008年7月, 47-51頁。
 43. (単著)「「尊厳ある死」を望むこと」(特集=「生きるに値しない」とされた生命へのまなざし)『福音と世界』, 第65巻4号, 2009年5月, 44-45頁。
 44. (単著)“‘Good Manner of Dying’ as a Normative Concept: ‘Autocide,’ ‘Granny Dumping’ and Discussions on Euthanasia/Death with Dignity in Japan,” *International Journal of Japanese Sociology*, 19 (1), November 2010, 49-63.
 45. (単著)「「いのちの教育」:臓器提供を「訓育」する装置?——カズオ・イシグロ『わたしを離さないで』を「豚のPちゃん」の教育実践とともに読み解く」『立命館産業社会論集』第47巻第1号, 2011年6月, 237-258頁。

46. (共著)「生活のなかの死：地域社会での看取りを考える＜シンポジウムのまとめ＞」『医学哲学医学倫理』第29号, 2011年9月, 77-78頁。
47. (単著)「犠牲を期待される者——「死を掛け金に求められる承認」という隘路」(特集＝尊厳死は誰のものか——終末期医療のリアル)『現代思想』第40巻7号, 2012年6月, 198-209頁。
48. (単著)「『理性的自殺』がとりこぼすもの——続・「死を掛け金に求められる承認」という隘路」(特集＝自殺論——対策の現場から)『現代思想』第41巻第7号, 2013年5月, 162-177頁。
49. (単著)「死に至る憐れみ——啓蒙・抵抗・応答の一九七〇年代」(特集＝医者の世界——新しい医療との向き合い方)『現代思想』第42巻13号, 2014年9月, 178-197頁。
50. (単著)「『安楽死・尊厳死』をめぐる歴史的・社会的背景」(特集・「終末期医療の国民的議論」に向けて)『月刊 保団連』1223号, 2016年9月, 4-9頁。
51. (単著)「『生きるに値しない生命終結の許容』はどのように語られたか——日本法学界における「安楽死・尊厳死」論史の一断章」(緊急特集＝相模原障害者殺傷事件)『現代思想』第44巻第19号, 2016年10月, 102-113頁。
52. (単著)「現代医学における「死の選択」が問いかけるもの」(特集 死後の世界と死の準備)『大法輪』2018年10月, 135-142頁。
53. (共著)「ハンドル形電動車いす利用者をめぐる実態と法制度——日本・ドイツ・韓国を中心に」『立命館人間科学研究』第38号, 2019年1月, 91-100頁。
54. (単著)「歴史の忘却と連続性——語られてきたナチス「安楽死」政策とコロナ禍の現在」『新薬と臨牀』第70巻12号, 2021年12月, 59 (1535) - 66 (1542) 頁。
55. (共著)「特集趣旨」(特集2 情報アクセシビリティのいまとこれから)『立命館生存学研究』vol.6, 2022年8月, 45-47頁。
56. (単著)「開会挨拶」「分断ではなく架橋へ——何らかの「困りごと」をもつ学生と何らかの「困りごと」をもつ教員支援の未来」(特集2 情報アクセシビリティのいまとこれから)『立命館生存学研究』vol.6, 2022年8月, 49-50, 87-89頁。
57. (共著)「特集趣旨」「講演1「障害のある教員」の職場復帰のプロセスと課題」(特集3 立命館大学土曜講座「障害のある先生が仕事を続けるということ——障害と教育の交わるところ」)『立命館生存学研究』vol.7, 2023年9月, 85-88, 89-109頁。
58. (単著)「立岩真也さんと生存学のこと」(総特集＝立岩真也1960-2023)『現代思想』第52巻第3号, 2024年2月, 223-228頁。
59. (単著)「生命と倫理——『虎に翼』『燕は戻ってこない』『PLAN 75』『Maelstrom』を通して」岩壁茂編『臨床心理実践サバイバルガイド (『臨床心理学』増刊第16号)』, 2024年8月, 32-38頁。
60. (共著)「特集趣旨」「『PLAN 75』トークセッション」「資料1-3」(特集1「『PLAN 75』が問いかけるもの」)『立命館生存学研究』vol.8, 2025年2月, 5-7, 9-17, 19-22頁。

その他

1. (単著)「男女平等教育にとりくむために——教師が省みなければならないこと」『高校ホームルーム指導ハンドブック』追録第10号, 1994年。
2. (単著)「性の二重基準をうつ——高等学校の現場から」『てくてく キリストと歩こう』114号, 1997

- 年2月, 8-11頁。
3. (単著)「「デス＝エデュケーション」を問いなおす——生命倫理学の視点から」『SOGI: The Magazine for Funeral Service』No.71, 2002年9月, 55-59頁。
 4. (単著)「子どものための「生命倫理」有村久春編集『「命を大切にする教育」をどう進めるか』教育開発研究所, 2005年5月, 16-19頁。
 5. (単著)「マーサ・ベック著『あなたを産んでよかった』——障害をもつ子の出生とともに, 自らを生み直す, 障害をもつ子の親の物語」(文学の中の障害者像)『ノーマライゼーション 障害者の福祉』第25巻通巻291号, 2005年10月, 46-48頁。
 6. (単著)「文献紹介 島菌進著『いのちの始まりの生命倫理——受精卵・クローン胚の作成・利用は認められるか』(春秋社, 2006年1月)」『日本生命倫理学会ニューズレター』33号, 2006年10月, 4-5頁。
 7. (共著・シンポジウム)「子どもたちが輝く社会とは——現代社会のありかたを子どもの視点から問う」[産業社会学部子ども社会専攻小学校教員養成課程開設記念シンポジウム2006年12月3日(日)]『立命館産業社会論集』第42巻第4号, 2007年3月, 205-253頁。
 8. (共著)「異なる学知のポリフォニー」安部彰・有馬斉編『生存学センター研究報告8 ケアと感情労働』2009年3月, 100-125頁。
 9. (単著)「生命倫理」「未来を拓く——ようこそ立命館へ」編集委員会『未来を拓く——ようこそ立命館へ』立命館大学, 2010年4月, 90-91頁。
 10. (単著)「図書紹介: 立岩真也・有馬斉編 生死の語り行い1——尊厳死法・抵抗・生命倫理学」『リハビリテーション』NO.554, 2013年6月, 32-33頁。
 11. (単独・インタビュー)「生きて存るを学ぶ「生存学」——生存学研究所」(特集=命は自分のものか)『同朋』第72巻第12号[通巻836号], 2020年12月, 18-19頁。
 12. (単著)「随想随筆(1) 死生と関わる主題 通奏低音のように響く」「随想随筆(2) なぜ? という問い番組が与える影響懸念」「随想随筆(3) 「わきまえ」の分水嶺 端的に表れる社会のひずみ」「随想随筆(4) 謝罪文に思う 加害—被害間に越えがたい溝」『中外日報』2021年10月1日、2021年10月8日、2021年10月15日、2021年10月22日 第4面。
 13. (単著)「ただ生きて存る命がリスpektされる未来を創りたい」ハピネットファントム・スタジオ編『PLAN 75』(映画パンフレット), 2022年6月, 12-13頁。
 14. (単著)「立岩真也先生を悼む」『立命館生存学研究』vol.8, 2025年2月, 97頁。
 15. (単著)「わたしのオランダ」『さんしゃ Zapping』Vol.39 No.2 [207号], 2025年3月, 2-4頁。

学会報告・その他

1. (単独)「ジェンダー／セクシュアリティをどう扱うか——レイプ神話とセクシュアル・マイノリティを手がかりに」日本社会科教育学会第52回全国研究大会, 課題研究「マイノリティをどう扱うか——エスニック・ハンディキャップ・ジェンダー」 於: 千葉大学, 2002年10月。
2. (単独)「ジェンダー「教育」の手前で——価値「中立」性と「当事者」性の隘路を跨ぐ」日本社会科教育学会第53回全国研究大会, 課題研究「社会科教育とジェンダー」 於: 群馬大学, 2003年10月。
3. (単独)「「遺伝学的市民」像と生命倫理教育」日本社会科教育学会第54回全国研究大会, 於: 愛知教育大学, 2004年11月。

4. (単独)「『尊厳死』言説の誕生とキリスト教の関わり——試論のための覚え書き」京都NCC生命倫理研究会例会，於：京都NCC宗教研究所，2007年9月。
5. (単独)「高校「倫理」の教育内容と教科書編集に関わる諸問題？——「いま」「ここ」で「知を愛すること／善く生きること」を問う営み」ワークショップ「高等学校「哲学・倫理」の現状と課題」座長：坂井昭宏 日本哲学会第68回大会，於：慶応大学三田キャンパス 第4会場 第一校舎124，2009年5月。
6. (単独)「憎むのでもなく、許すのでもなく——歴史に立ち会うこと、歴史の証言者となること」上智大学グリーンフケア研究所人材養成講座 特別講義，於：上智大学11号館，2015年12月。
7. (単独)「優生保護法と安楽死・尊厳死運動史」第2回生命倫理政策史研究会「優生保護法史の多角的検討」，2019年8月。
8. (単独)「安楽死・尊厳死論の歴史と宗教——「わたし・たち」の物語を語り直すために」東本願寺教学研究「生老病死と現代」所内研究会，オンライン，2021年6月。
9. (単独)「『障害の経験』を共有する痛み（と希望）」(閉会挨拶に代えて)「障害者と労働」研究会 2021年度公開研究会「重度障害者の介助付き就労の可能性——「健常者より優秀でないと社会で生きていけない」のか？」オンライン，2022年2月。
10. (単独)“Supported Decision-Making and Accessibility: on Euthanasia / Death with Dignity (Session3, Supported Decision-Making),” TaiPei, 2024 East Asia Disability Studies Forum (EDSF), 2024.10.
11. (単独, パネリスト)「生存学（障老病異）の観点からの身体圏研究」, BKC 開設30周年記念企画・身体圏研究連続シンポジウム第3回「多重環境化社会を生きる 私・身体・心」, 於：立命館大学びわこ草津キャンパス・ローム会館，2024年11月。
12. (共同, 企画・オーガナイズ・司会) Prof. Angharad E. Beckett, “Vulnerable Personhood and Social Exclusion in the Welfare State”, 第36回日本生命倫理学会大会・大会企画特別講演，於：立命館大学大阪いばらきキャンパス，2024年11月。
13. (単独, 企画・オーガナイズ)「『Maelstrom』上映会&トークセッション——山岡瑞子監督を迎えて」社会学研究科「現代社会特殊研究」とのコラボによるオンライン，2025.2。

Ⅳ. 社会における活動

学会活動

1996～1998	東京都高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会事務局長
2004～2009	日本公民教育学会理事
2008～2014	日本医学哲学・倫理学会理事
2011～2013	日本生命倫理学会理事
2016～2018	日本医学哲学・倫理学会監事
2017～2020	日本生命倫理学会理事
2018～2023	日本医学哲学・倫理学会理事
2023～	日本生命倫理学会理事

各種委員等

1996～2004	大学入試資格検定試験・高等学校卒業程度認定試験問題作成委員
2005～2008	NHK ラジオ高校講座「倫理」講師
2007～2008	文部科学省高等学校学習指導要領（平成21年告示）解説「倫理」協力者
2011～2014	日本学術振興会科学研究費助成事業「生命倫理学」審査委員

以上